

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 4 月 20 日	
所属部局・職	霊長類研究所 生態保全分野・修士課程 1 年
氏名	武 真祈子

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
京大原子炉実験所 (大阪府)、瀬戸臨海実験所 (和歌山県)、京都市動物園 (京都府)、生態学研究センター (滋賀県)、霊長類研究所および日本モンキーセンター (愛知県)
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
インターラボ
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 4 月 8 日 ~ 平成 26 年 4 月 11 日 ( 4 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学理学研究科生物科学専攻
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>インターラボでは、上に記した 6 つの施設を、4 日間かけて訪問・見学させていただいた。一番の成果は、京都に友達ができただけのことである。特に、今後関わる人が多いであろう WRC の同期生や、研究テーマの近い生態学研究センターの同期生と交流を持てたことは収穫であった。どの人の研究もとても面白そうであった。次に会うときは、研究の進捗や新たな知見などの情報交換ができると思うので、楽しみである。期間中、霊長研メンバーとは京都教育文化センターで寝起きを共にしたので、身内での絆が深まったのも収穫だと言える。一方で、自分の興味に近い分野の学生としか交流を持てなかったふしもある。今後の研究の可能性を広げるという観点からいくと、細胞生物学などマイクロ分野の人ともっと積極的に話をすればよかったというのが反省点だ。ただ、おそらく友達の友達くらいの距離感にはなれたと思うので、今後チャンスがあれば交流を深めていきたい。</p> <p>また、私はキュレーターという仕事に興味を持っていることから、京都市動物園や日本モンキーセンターでは大学との連携を生かしてどのような活動を行っているのか、という点に問題意識を持って参加した。特に興味深かったのは、京都市動物園でのゾウの糞利用のお話である。ゾウの糞を堆肥化したものを、小学校の畑に提供し、小学生が育てた野菜をゾウの餌にする、といった計画があるそうだ。小学生への環境教育や、集客にも効果がありそうだと感じた。将来的には、いろいろな動物の糞を肥料にして作ったブランド野菜を売店で販売することも可能なのではないかと思った。動物糞からの堆肥を市内の植物園に提供する取り組みは、もう始まっているそうだ。このような異なる園同士の連携にも、可能性を感じた。陸上動物、水中動物、植物を全部まとめて見せることは、たいていの場所では不可能だ。だが、動物園と植物園でリンクした解説版を作るなど、異なる園同士が協力すれば、都市の中にあっても包括的に自然のあり様を伝えることが可能だと思う。また、モンキーセンターでは、大学との連携や教育普及のための活動がより前面に押し出されていた。隔週で開催されているモンキーサロンが例としてあげられる。学芸員の方自身が博士号を取得されており、霊長類学の専門家であることが、そういった活動を可能にしているのだと思う。各霊長類の生態展示や解説も信頼でき、普通の動物園と博物館登録のされている動物園との違いを感じた。フィールドミュージアム、特に植物分野での博物館的活動が今後の私の大きなテーマになるが、今回見聞きし考えたことをもとにアイデアを膨らませていきたいと思う。 &lt;平成 26 年 5 月 28 日制定版&gt; 提出先: <a href="mailto:report@wildlife-science.org">report@wildlife-science.org</a></p>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

以下、インターラボの全行程について、時系列に沿って簡単に紹介する。

### ◇原子炉実験所（1日目）

ここでは、当施設で行われている研究や医療についてのレクチャーを受けた後、実際の原子炉を見学させていただいた（写真1）。2011年の震災後、稼働は停止している。再稼働のための基準があまりにも厳しすぎる、といった内容のお話もあった。稼働を望んでいる立場の方からのお話を聞いたことは、原子力についての考えを深める上で有意義であったと思う。また、原子炉から出る放射線が腫瘍の除去等の医療にも用いられていることは、原子力利用の側面として新鮮であった（写真2）。



写真1. 原子炉の上の覗き窓。

稼働時であればここから核燃料が見える。



写真2. 放射線医療の装置。緑の壁のすぐ向こうが原子炉。手前のベッドに寝て、奥の穴に患部を固定し、放射線を照射する。

### ◇瀬戸臨海実験所（1日目～2日目）

ここでは、全員で宿泊して交流を深めるとともに、大自然を満喫した（写真3、写真4）。浜あり、磯あり、山もありの素晴らしい立地で、今回のような機会に訪れることができ本当によかったと思う。ぜひ、いつの日か公開臨海実習に参加したい。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真3. 洞門岩と赤潮。



写真4. 海辺でお弁当。

◇ 京都市動物園（3日目・午前）

生き物・学び・研究センターの田中正直先生に解説していただきながら、園内を見学した（写真5、写真6）。その後、廃校になった小学校（公共の施設として利用されている）に移動し、そこで保管されている大量の剥製や骨格標本を見せていただいた。キリンの頭骨は、なるべく軽くするため、スポンジのようにすかさかの構造をしていることを知り、生態と形態の結びつきを実感した（写真7）。



写真5. 泥遊びをする4頭の子供のゾウ。



写真6. カバのつぐみちゃん。



写真7. キリンの頭骨。脳部分が開くようになっている。

◇ 生態学研究センター（3日目・午後）

ここでは、若手研究者のみなさんによる研究紹介の後、人工気象室や、水生生物の飼育場などの施設を見学させていただいた。植物、昆虫、魚類、菌類そして理論まで、生態学という大きなテーマの下に幅広い研究が行われていた。分野の違う仲間が近くにおいて議論できる環境は素晴らしいと感じた。霊長研も同じ特徴を持っているので、他分野の人とのつながりを大事にしていきたい。



## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

### ◇ 霊長類研究所（4日目・午前）

平井啓久所長から研究所の概要をお聞きしたあと、三班に分かれて所内を見学した。チンパンジーの放餌場、ニホンザルの放餌場、レストラン隣の展示スペースを順にまわった。京都の同期生たちに霊長研をアピールできてよかったと思う。

### ◇ 日本モンキーセンター（4日目・午後）

はじめに、主席学芸員の高野智さんのお話をお聞きした。モンキーセンターの歴史や、霊長研との関係など、これまであやふやだったことが理解できた。次に標本庫や病院の施設を見せていただいた後、1時間ほど自由に園内をまわった。モンキーセンターを訪れるのは初めてだったが、リスザルやヤクザル、ワオキツネザルなど、思っていた以上に近くで見ることができ、興奮した（写真8、9）。



写真8. えさを要求するヤクザル。



写真9. 至近距離までやってきたワオキツネザル。

## 6. その他（特記事項など）

インターラボは、PWS リーディング大学院の支援を受けて行われました。ありがとうございました。また、引率して下さった先生方、受け入れ・対応をしてくださった各施設の皆様にも心より感謝いたします。